# 長い知性、短い知性

国際コミュニケーション学部教授　　新 形　信 和

知性に寸法があるなどというと、意外な感じがする人も多いかもしれません。しかし、知性には寸法があるのです。長い知性は連続的な知性といってもいいでしょう。連続的ですから射程が長いのです。それにたいして、短い知性は非連続で断片的な知性ということができます。非連続で断片的だから射程が遠くまでとどかないのです。実例を一つだけ挙げてみます。もうずいぶん昔に新聞の学芸欄で読んだ都築卓司という人の文章の要約ですが、日本とヨーロッパの乗り物の歴史の比較の話です。

古代日本の牛車は中国から入ってきた。牛車とは「牛にひかせた乗用の屋形車」（広辞苑）で、そのなかに高貴な人たちが乗ったものである。ところが、がたがた揺れて乗り心地がよくないというので牛車は廃止になった。つぎに登場したのが輿である。これは牛にひかせるのをやめて、車輪を取り去り、屋形部分の底辺の左右に長い棒状の材木を一本ずつ取りつけてその前後を複数の人間が担ぐ乗り物である。しかし、それでもよく揺れるというので、人が乗る屋形部分を担ぎ棒の下にもってきたら乗り心地がよくなるだろうと考えて、いわゆる駕籠ができた。担ぎ棒は一本になった。大名から庶民まで、西洋文化を知るまでの日本人はこの乗り物を利用していた。これが日本の乗り物の歴史である。

ヨーロッパでは牛車ではなく馬車である。がたがた揺れて乗り心地がよくないというので、車輪がころがる道路をなめらかにしようと、ギリシアでは平たい石を敷き詰め、ローマでは土を掘り起こして舗装した。また、車輪の振動が乗用部分に直接に伝わらないように車軸と乗用部分を切離し、皮製のサスペンションをつけた。やがて産業革命の時代になると、牽引するのは馬ではなく蒸気機関に代わり、現在の自動車や汽車などの原型が誕生した。

日本の乗り物の発達（？）の歴史のなかには日本文化のある側面がみごとに現れていると思いませんか（もちろん、すべてではありませんが）。最近、気になるのは、生活の身近なところで、日本文化の短所である、断片的で非連続の短い知性が横行しているように思えることです。

現在、楽天にいる野村監督がまだヤクルトにいたころのことですから、もうだいぶ昔のことになりますが、野村氏が、若い選手にとって一番大切なことは感性を磨くことや、感じなかったら何も考えやせん、人は感じるものがあってはじめて、それについて考えるんや、と語っているのを聞いて感心したことがあります。それは、野球にかぎったことではなく、人生一般についても言えることです。詩人の長田弘氏も、**『**「考える」とは理屈をつけることではなく、「深く感じる」ということ。「深く感じる」力を自分の中に育てられないと、何も見えてこないんじゃないだろうか**』**と語っています。「深く感じる」力を自分のなかに育てることによって、知性は連続的になり長くなるのです。

現在はＩＴ化の時代です。インターネットを通じて無限の情報に接することができるようになりました。一昔前と比べれば夢のように便利な手段が簡単に利用できます。しかし、かんじんなことは、簡単に手に入る情報そのものにではなく、その情報の奥に、あるいは、情報と情報との、いわば、あいだにあるのではないでしょうか。サン＝テグジュペリの『星

の王子さま』のなかのキツネのおじいさんが語っている「かんじんなことは、目に見えないんだよ」ということばを忘れるようなことがあってはならないと思います。

わたしなどは古い人間のせいでしょうか、ワープロやパソコンの画面に浮かぶ文字はなんだか頼りなくて、違和感が残ります。文字にむかう視線がきちんとこちらに帰ってこない感じがするのです。その点、紙に印刷された活字はしっかりしていて、視線はちゃんとこちらに帰ってきます。ですから、活字と自分とのあいだで確かな対話をかわすことができるような気がするのです。「深く感じる」力を育てるには、そのような対話を欠かすことはできません。

もう数十年前のことになりますが、わたしの学生時代は、現在のように情報が簡単に手に入る手段はもちろんありませんでしたし、図書館もずっと貧弱で不便なものでした。愛知大学の図書館を見ていても、現在の学生は恵まれているなーとよく思います。しかし、不便ではありましたが、自由だったと感じることがあります。自分で苦労して情報を手に入れて、その情報とゆっくり対話をかわすゆとりが十分にあったからです。現在から見れば、そのように強制されていたのだと言えるのかもしれませんが、どんなに豊富な情報が手に入ろうとも、かんじんなことが、情報そのものにあるのではなく、ある情報の奥に、あるいは、情報と情報とのあいだに存在するのであれば、情報そのものにとらわれることなく、自由でありえたと言えるのではないでしょうか。

将来、図書館が電子化しても、本という媒体が必要ではなくなることはないでしょう。また、必要ではなくなるようなことがあってはならないと思います。それは、わたしなどからすれば、知性がますます断片化し短くなっていくことを意味するからです。

さきほど、わたしの学生時代に図書館が貧弱だったと言いました。たとえば、当時、ドストエフスキー全集は戦前のものを除けば、古い米川正夫訳のものが一種類あるだけでした。現在では、筑摩書房版、河出書房版、新潮社版など何種類もあってたいへん便利です。『悪霊』をはじめて読んだのは、小沼文彦個人訳の筑摩書房版全集でした。最近、この『悪霊』のことをよく思い出します。図書館から依頼を受けて「長い知性、短い知性」という題で原稿を書きはじめたのも実は『悪霊』のことを思い出したからです。『悪霊』は「ネチャーエフ事件」に触発されてドストエフスキーが書いた長編小説です。この作品にはスタヴローギン、キリーロフ、シャートフ、ピョートルなど様々なしかたで「悪鬼にとり憑かれた」印象的な人物が登場します（これらの人物のうち、シャートフは殺害され、スタヴローギンとキリーロフは自殺します。ネチャーエフをモデルにしたピョートルだけは計画が破綻しそうになると組織を捨てて遁走します）が、いま念頭にあるのは、ピョートルの父親であるスチェパン氏のことです。前記の登場人物の父親の世代である 1840 年代の西欧的知識人である彼は、作品の終わりで次のように述懐しているのです。「わたしたちはみんな悪鬼に憑かれて、狂い回りながら崖から海へ飛び込んで、溺れ死んでしまうのです。それがわたくしたちのたどる道なのです」と。

悪鬼がつけ入ることができるのは、短い知性にたいしてです。スチェパン氏の時代のロシアというのは、西欧文化をロシアが受け入れるようになってから 140 年ほど経過していました。ちょうど同じくらいの時間が日本でも経過しています。現在の日本において、長い知性をもつこと、「深く感じる」力を育てること、が、いま、焦眉の問題として差し迫っているように思われてなりません。

2008 年 9 月 5 日記